

古書古人 (5)

人名録

『諸家人名江戸方角分』

朝倉治彦

『諸家人名江戸方角分』は、今、はじめて聞く人名録ではない。林若樹さんの蔵書であった頃から、書名は知られていたものである。昭和13年9月、東京図書倶楽部で林さんの蔵書売り立ての下見が行なわれたとき、森銃三氏は、23日同所へ出かけて手にされたときの報告を記されている。「若樹文庫本の覚書」がそれである。

その中で、本書にふれている条を抜抄しよう。

蜀山人の奥書があり、達磨屋の蔵印がある。この本に就いては嘗て三村翁から伺つてゐる話もある。内容は化政度の江戸の名家を住所分列記したもので、浮世絵師などが大分挙つてゐるのが参考になるが、私にはその中に花長老の諱名のあつた俳人山崎春樹が、駒込の条の中に

春樹 号宝山居 竹町焼接屋弥市として出てゐたのがなつかしかつた。民政家として知らるゝ小島蕉園に、二葉の狂名のあつたことなどもこれで分る。

三村翁というのは、三村清三郎、職

竹屋なるをもつて竹清と号した蔵書家である。山崎春樹については、森氏は「老樗軒とその墓石」中に、小島蕉園もまた詳しい伝記をものさされているので、注意をひかれたものと推察される。

本書は、横本(17纏×11.7纏)にして、空色表紙、題簽欠、全76丁。巻首の遊紙に「若樹文庫」、内題下に達磨屋五一の「待買堂」、終丁裏にも五一の角印が捺されている。蜀山人の奥書というのは、終了裏に

此書歌舞伎役者瀬川富三郎所著也と。裏表紙見返しに

文政元年七月五日竹本氏写来

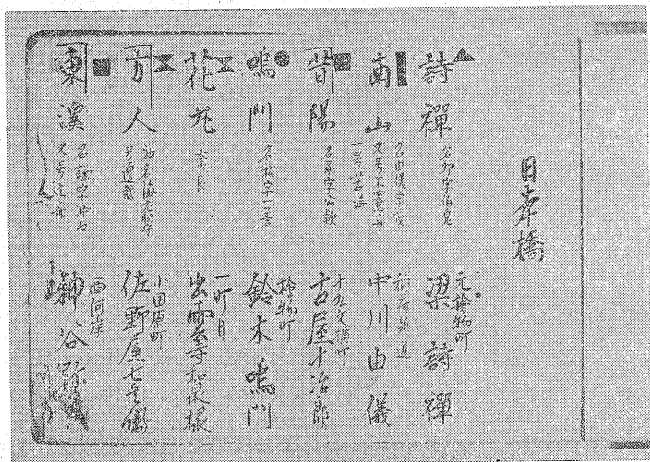
七十翁蜀山人

と、2箇所にある。

『国書総目録』を見ると、瀬川富三郎著の『東都諸家人名録』写本1冊が東京教育大学の所蔵として著録されている。同内容のものであろうか、気にかかる。なお、瀬川は、寛政12年刊『日本諸家人名録』2巻1冊の著者でもある。

内題に続いて、凡例がある。これをうつつして、同類書の報告をしていただく手だてとしよう。句読点は、私に施した。

中古ヨリ用米レル諸家人名録多シト雖、宿所俗姓等審ナラス、ことニ綴文ニシテ懐用ニ弁ナサス。依此、二十年来東都ニ名高キ諸家の名字号・俗姓・宿所等悉記シ、東西ヲ分チテ一枚摺トナシ、書・画・詩・西ヲ



分歌・連・譜ノ品定メ、其人ヲ訪フ一助トス。且、遠境僻地ノ雅友、東都ノ音信揮毫等需玉フ枝折トモナランカシ。

俳諧・狂歌判者披露相済候御仁、追而相加入申候

これに続けて、業分契と出して、学者は■印、詩人は▲印、画家は●などの区別の印を列記して、「此印ヲ以テ混雜ノ感ナクシ(テ脱カ)見安カラシム」と注してある。学者・詩人・画家のほかは、書家、本歌師、連歌師、俳諧師、狂歌師、戯作者、浮世画師、篆刻家、古人などである。

上記の凡例によると、綴本は携帯に不便であるから、一枚摺としたとあるが、本書は写本である。一枚摺を写したのであろうか。これに内容の一致する一枚刷は、見る機会を、今日まで得ない。

また、凡例のはじめにいう諸名家人

名録は、『江戸当時諸家人名録』の類を指すものと考えられ、中古は時代分けて現在使用している称呼ではあるまい。

次に、凡例後部に言い及んでいる本書の効用は、また近世後半に刊行された人名録の目的をも、明言したものと見てよいであろう。

凡例に続いて、蜀山自筆の、地域別一覧が書きつけられている。日本橋にはじまって、江戸城を西へ廻り、さらに北へ行って東部へという方向は、本書が方角分であって、別本人名録の如く人名の50音順になってないことによって、この地名列挙は、目次の役目を果たし、検索の便となっている。

本文は、1人1行の体裁で、区別の印を頭に置いて、通行の号を出して、下に、字、他号、住所、姓名の記述となっている。

(あさくら・はるひこ 一般参考課主査)